

令和 6 年 6 月 4 日現在

機関番号：34534

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02658

研究課題名（和文）最近の子どもの発達はますますアンバランスになってきているのか？

研究課題名（英文）Is the development of recent children increasingly delayed or unbalanced?

研究代表者

郷間 英世（Goma, Hideyo）

姫路大学・看護学部・教授

研究者番号：40234968

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本の子どもの40年間の精神発達の変化の特徴を明らかにすることを目的とした。方法は2020年までに収集された3200の発達検査の資料の年齢別通過率や50%通過年齢を算出し過去のデータと比較した。その結果、多くの課題では変化がなかったのに対し特定の領域は促進または遅延していた。例えば「色の名称」課題では約12か月の促進が、「図形模写」課題では11か月、「折り紙」課題では6か月の遅延が認められた。結果を研究論文や国際学会で報告した。また、2022年より変化の要因の究明のためヘルシンキ大学と共同研究を行っている。さらに、子どもの発達研究について著書にまとめ2024年夏出版予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、我が国の子どもの40年間の発達の変遷について、多くの発達課題では変化が少ないのに対し、特定の発達課題では発達の顕著な促進が、別の課題では顕著な遅延が認められた。これらの結果は、子どもの生活習慣や養育環境の変化によるものと考えられ、これからの子どものより良い成育環境を構築していくための政策を考え実施していく際の、大きな根拠となると思われる。また、変化の要因について、早急に詳細な究明が必要と考えられ、今後行っていく予定である。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to investigate the developmental trends and changes in Japanese children over 40 years. Data were collected using standardized testing materials. Individual assessment data were gathered for 1026 and 1655 children, aged 1~13 years old, from 1983 and 2020, respectively. We compared the "50%-passing ages" for each of the 115 items in both samples. Results are as follows. Many test items demonstrated minimal change; however, several items in various developmental areas reported remarkable acceleration, while others showed conspicuous delay. Particularly, for naming the four colors development was found to be accelerated by 12 months. However, development of the origami tasks by 3~6 months and development of copying figures had been delayed by 9~11 months. These developmental changes were attributed to rapid social and nurturance environmental changes. It may be essential to observe and understand these changes and support them better in the future.

研究分野：小児神経

キーワード：子ども 発達 発達障害 環境 養育 発達促進 発達遅延 発達の変化

## 研究成果報告内容ファイル（郷間）

### 1．研究の背景

社会の諸構造の急激な変化と貧困や虐待など社会病理が目立つ環境の中で、現代は子育て・子育てが難しい状況にあるといわれている。子どもたちの様子を見ると、落ち着きのない子ども、容易に困難さから回避する子ども、容易に「キレル」「ムカつく」など短絡的行為を示す子ども、感情の不安定さや衝動コントロールの弱さを持った子どもが目立ってきていることは、かなり以前からいわれているが改善される気配はない。また、通常学級に在籍している発達障害児の割合は文部科学省の調査で6.5%（2012）（2022年の同調査では8.8%と増加）であり、低学年ほど高い割合を示している。

このような状況の中、子どもたちの発達の詳細な実態やその変化、変化の原因などについて継続的になされている研究はほとんどない。それは子どもの発達や行動について一定の方法と尺度で長期にわたり評価していくことが困難であるためと考えられる。しかし我々は、新判K式発達検査の標準化資料を用いてこれまでも継続して行ってきた。

### 2．研究の目的

- （1）発達検査の標準化資料を用いて1983年、2001年、2020年版の標準化データを比較し、子どもの発達の変遷を明らかにすることを第1の目的とした。
- （2）変化が認められた場合はその要因について検討することを第2の目的とした。
- （3）研究成果を本にまとめることを計画し第3の目的とした。

### 3．方法

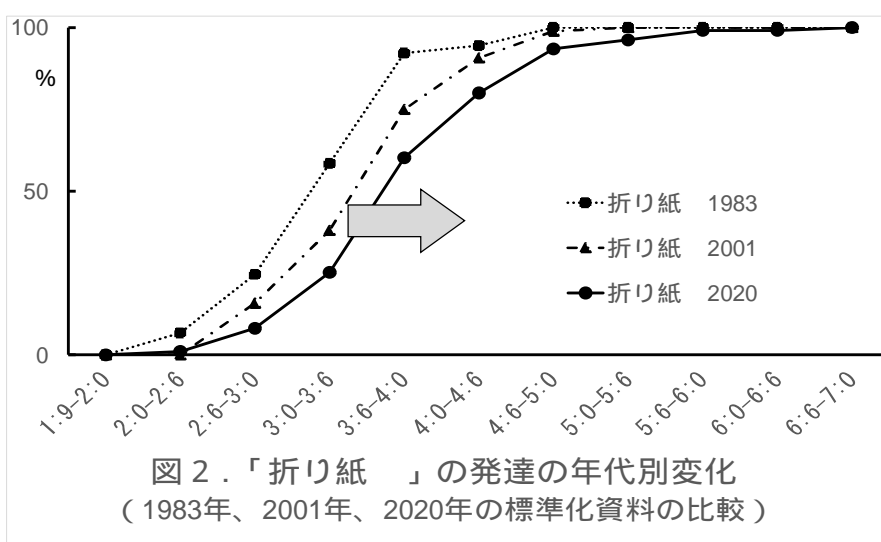
- （1）新たに加わる2020年の3200余りの標準化資料のデータは、まず、発達検査の各課題について、年齢別通過率（各年齢ごとの課題に合格した割合）や50%通過年齢（半分の子どもが合格する年齢）を求める。次いで、過去の年度の標準化資料のデータと比較し、1983年以降の子どもの発達の変化の全体的特徴を検討する。また、1983年から2001年にかけて発達の遅延が著しかった発達課題である「描画」「身体各部」「左右の弁別」「絵の叙述」などの項目や発達の促進が目立った「色の名称」の項目について、2020年の子どもではどのような変化がみられるのか検討する。
- （2）養育環境や生活環境を調査し、発達に影響を与える要因を検討する。
- （3）研究成果の出版計画を立て、本の発刊を目指す。

### 4．研究成果

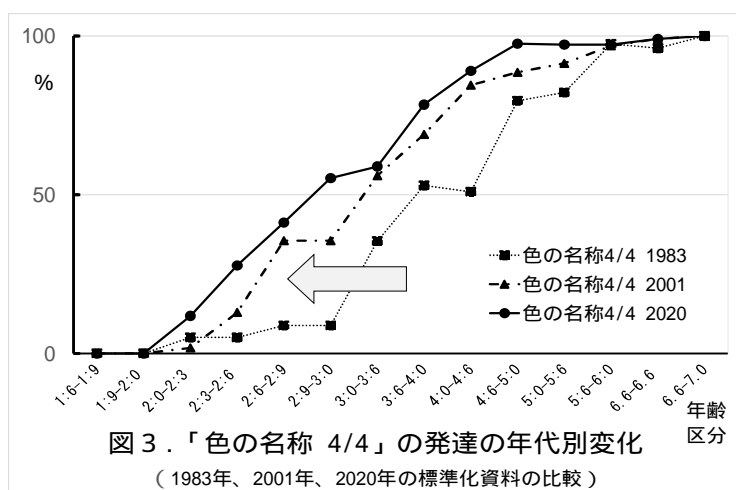
- （1）1983年から2020年までのおよそ40年間の子どもの発達は、全体的にみると大きな変化はなかったが、いくつかの発達課題で顕著に促進した課題や遅延した課題がみられた。促進したのは「色の名称」課題で4つの色を答える検査項目では12ヵ月の変化がみられた。遅延した

のは「図形模写」や「折り紙」課題であり、「正方形模写」「三角形模写」「菱形模写」では9～11ヵ月、折り紙を何回か折る検査項目である「折り紙」「折り紙」では3～6ヵ月の変化が認められた。

折り紙について、詳細に述べると、正方形の折り紙を2回折って4分の1の大きさの正方形にする「折り紙」は1983年から2020年の約40年間で4ヵ月、それをさらに対角線で折り直角三角形をつくる「折り紙」は6月遅れてきていた。そのため、今回「折り紙」「折り紙」の検査用紙での配置が2001年版より一つ右側の高い年齢域に変更された。「折り紙」の約20年おきの年齢ごとの通過率のグラフを図2に示した。グラフは1983年から2001年、2020年へ経年的に右に移動しており、子ども全体の発達が遅延していることが示唆された。



一方、赤、青、黄、緑の4つの色を見て、色の名称を答える「色の名称」課題は、発達が一貫して促進してきている課題で、40年間の間に12ヵ月促進していた。この課題の年齢別通過率の変化を図3に示した。



これらの発達の変化は、社会環境や養育環境などの急激な変化に伴い、子どもの認知や運動の発達が変化してきたことが推測された。この変化をどうとらえ、どのように対応していくかは今後の課題である。

#### (2) ヘルシンキ大学との共同研究、

これまでの検査結果についての新たな分析方法について、ヘルシンキ大学の Karri Silventoinen 教授に 2022 年に相談し、その原因としての環境要因、生活習慣の要因について、ロジスティック分析を用いて共同研究を行うことになった。現在その結果の一部が出始めたところであり、現在進行形である。

#### (3) 書籍の出版

2023 年に我々の本研究の研究成果も含め、「新版 K 式発達検査による子どもの理解と発達支援」(編者 郷間英世・清水里美)の出版を計画した。現在 12 人の原稿が集まり、校正中である。2024 年 8 月にナカニシヤ出版(京都)より発刊の予定である。

### 研究組織

研究代表者 郷間英世(姫路大学、医学、研究者)

研究分担者 牛山道雄(京都教育大学、研究者)

研究協力者 大谷多加志(光華女子大学、発達心理学、研究者)

清水 里美(平安女学院大学短期大学部、発達心理学、研究者)

田中 駿(京都国際社会福祉センター、発達心理学、特別支援教育)

全有耳(奈良教育大学、医学、研究者)

清水寛之(神戸学院大学、発達心理学、研究者)

Karri Silventoinen(ヘルシンキ大学、研究者)

石川素子(ヘルシンキ大学、研究者)

郷間安美子(京都国際社会福祉センター、公認心理士)

足立絵美(京都国際社会福祉センター、公認心理士)

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 清水里美, 大谷多加志, 田中駿, 原口喜充, 郷間英世	4. 巻 第22号
2. 論文標題 現代の成人の発達に関する検討-新版K式発達検査標準化資料の経年変化に基づいて-	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 平安女学院大学研究年報	6. 最初と最後の頁 59-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 郷間英世	4. 巻 第2号.
2. 論文標題 成人期の知的障害者の生活と課題-仕事、余暇、医療、結婚などについてQOLの視点から-	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 姫路大学健康・教育実践研究センター年報	6. 最初と最後の頁 35-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 郷間英世	4. 巻 Vol.38
2. 論文標題 障害者と家族のライフストーリー ( ) -自閉スペクトラム症を併せ持つ重度知的障害者とその家族へのインタビューを通して-	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 京都国際社会福祉センター紀要「発達・療育研究」	6. 最初と最後の頁 35-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 郷間英世	4. 巻 第6号
2. 論文標題 子どもの発達研究 新版K式発達検査の開発を通して -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 姫路大学看護学研究科論究	6. 最初と最後の頁 13 - 22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中駿, 郷間安美子, 井上和久, 牛山道雄, 清水里美, 落合利佳, 池田友美, 加藤寿宏, 郷間英世	4. 巻 第34巻1号
2. 論文標題 幼児の初期の概念形成-なぞなぞ課題の作成から-	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 発達心理学研究	6. 最初と最後の頁 29-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 郷間 英世・田中 駿・清水 里美・足立 絵美	4. 巻 2
2. 論文標題 現代の子どもの発達の様相と変化 新版K式発達検査 1983 と 2020 の標準化資料の比較から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 発達支援学研究 (日本発達支援学会)	6. 最初と最後の頁 59-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 郷間英世	4. 巻 43
2. 論文標題 郷間英世、医療機関の発達外来における新版K式発達検査の利用を中心に、診断域下にある幼児・児童・生徒への教育支援に向けたアセスメントとその活用	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 発達障害研究 (日本発達障害学会)	6. 最初と最後の頁 352-364
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清水里美、郷間英世、他、	4. 巻 22
2. 論文標題 現代の成人の発達に関する検討 - 新版K 式発達検査標準化資料の経年比較に基づいて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 平安女学院大学研究年報	6. 最初と最後の頁 59-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中駿、郷間英世、他：自閉症スペクトラム幼児の新版K式発達検査2001と新版K式発達検査2020のDQの比較、発達療育、2022.1 3、	4. 巻 37号
2. 論文標題 ：自閉症スペクトラム幼児の新版K式発達検査2001と新版K式発達検査2020のDQの比較	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 発達と療育研究	6. 最初と最後の頁 3-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中駿、郷間英世、他	4. 巻 81
2. 論文標題 身体模倣の正中線交差と社会的スキルの関係性	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 小児保健研究	6. 最初と最後の頁 53-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大谷多加志、郷間英世、他	4. 巻 79
2. 論文標題 近年の乳児の発達速度の変化 2000～2001年と2015～2019年における新版K式発達検査2001の検査結果の比較	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 小児保健研究	6. 最初と最後の頁 380 - 387
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 田中駿、郷間英世、他	4. 巻 79
2. 論文標題 幼児期から自動機初期の身体模倣の発達と男女差	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 小児保健研究	6. 最初と最後の頁 607 - 616
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 田中駿, 郷間英世, 他	4. 巻 2号
2. 論文標題 動作模倣課題の発達と適応年齢	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都教育大学 総合教育臨床センター特別支援教育臨床実践拠点年報	6. 最初と最後の頁 1 - 10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大谷多加志, 清水里美, 郷間英世, 大久保純一郎, 清水寛之	4. 巻 30
2. 論文標題 幼児におけるじゃんけんの勝敗判断に関する発達段階の評価	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 発達心理学研究	6. 最初と最後の頁 142 - 152
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 郷間英世, 全有耳
2. 発表標題 新版K式発達検査の公刊と内容
3. 学会等名 第64回日本小児神経学会学術集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中駿, 郷間英世, 他
2. 発表標題 新版K式発達検査2001と2020のDQの比較
3. 学会等名 第69回日本小児保健協会学術集会
4. 発表年 2022年



1. 発表者名 田中駿, 郷間英世, 他
2. 発表標題 新版K式発達検査2020における自閉症スペクトラム幼児の発達特徴の予備的研究
3. 学会等名 日本LD学会第31回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 郷間英世
2. 発表標題 新版K式発達検査の理解と活用
3. 学会等名 日本LD学会第31回大会大会企画シンポジウム(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中駿, 清水寛之, 清水里美, 足立絵美, 郷間 英世
2. 発表標題 人間の発達曲線は何次式で表せるか-新版K式発達検査 2020の標準化資料の分析から-
3. 学会等名 日本発達心理学会第34回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Hideyo Goma, Yui Zen
2. 発表標題 Developmental trends and changes in Japanese children, comparing assessment data from 1983 and 2020
3. 学会等名 The World Association for Infant Mental Health 18th World Congress (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 郷間英世
2. 発表標題 新版K式発達検査2020の 改定作業の経過と公刊
3. 学会等名 日本小児保健学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 郷間英世、清水里美
2. 発表標題 新版K式発達検査2020-成り立ち・現在の役割・これから-
3. 学会等名 日本臨床発達心理士会17回全国大会公開講演会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田中駿、郷間英世、他、
2. 発表標題 性差を考慮した幼児版社会性・行動評価尺度の開発 「クイズ」課題の適用年齢について
3. 学会等名 日本小児保健学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 郷間英世
2. 発表標題 新版K式発達検査2020を発達支援に活かす
3. 学会等名 日本発達支援学会第3回大会、特別講演（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 郷間英世・全有耳
2. 発表標題 新版 K 式発達検査2020の公刊と内容
3. 学会等名 日本小児神経学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田中駿，郷間英世，他
2. 発表標題 幼児の身体模倣の発達の追跡調査
3. 学会等名 第67回日本保健協会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田中駿、郷間英世
2. 発表標題 ある自閉症児の発達の経過について K 式とWISCの推移から
3. 学会等名 第29回日本LD学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田中駿，郷間英世
2. 発表標題 性差を考慮した幼児版社会性・行動評価尺度の開発 - 就学前児用社会的スキル尺度との関連について
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 清水里美, 郷間英世, 他
2. 発表標題 現代の成人の発達に関する検討 新版 K 式発達検査2020年版標準化資料の分析から
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 郷間英世、他
2. 発表標題 新版K式発達検査2020の改定作業の経過と公刊
3. 学会等名 第6&回日本保健協会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hideyo Goma, et al
2. 発表標題 Creation of a scale for the assessment of social and behavioral development in preschool children
3. 学会等名 国際知的障害・発達障害学会（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 郷間英世、清水里美経著	4. 発行年 2024年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 300
3. 書名 新版 K 式発達検査による子どもの理解と発達支援	

1. 著者名 郷間英世	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 5
3. 書名 季刊発達169号：新版K式発達検査をめぐって	

1. 著者名 郷間英世監修 新版K式発達検査研究会編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 京都国際社会福祉センター発達研究所	5. 総ページ数 148
3. 書名 新版K式発達検査2020解説書（理論と解釈）	

1. 著者名 新版K式発達検査研究会編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 京都国際社会福祉センター発達研究所	5. 総ページ数 209
3. 書名 新版K式発達検査実施手引書	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	牛山 道雄  (Ushiyama Michio)  (90397836)	京都教育大学・教育学部・教授    (14302)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------